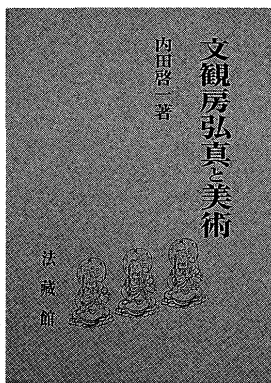


# 新刊紹介

内田啓一著

## 『文観房弘真と美術』

川瀬 由照



2006年2月20日発行  
法蔵館  
A5判 370頁  
定価 8000円(本体)

ある。

さて本書は、

- 第一章 出自と西大寺
- 第二章 西大寺比丘としての事蹟
- 第三章 醍醐報恩院流
- 第四章 弘真と後醍醐天皇
- 第五章 建武新政における弘真
- 第六章 南朝と弘真
- 付章 弘真の付法 ほか

表題にある文観房弘真(もんかんぼうこうしん)を聞いてその事績等々がただちに思い浮かぶ人は少ないであろう。著者の愛弟子たちはどうであろうか。真言宗の異端、立川流の大成者としては有名な人物であるが、これは邪僧としての悪名が高いだけで、これまで『太平記』等の記述によって怪僧・妖僧とされてきた。現在ではこうした点については疑問が多いとされる。美術との関連では、私もあまり良く承知はしていない。書店の予告をみて、はたして弘真とその美術だけで一冊になるのか、購入する人がいるのか心配していたが、実際手にしてみると史料と美術作品を縦横無尽に操作して弘真の人となり进行を明らかにしたものであることがただちに了解され、著者の世界に引きこま

れる。

文観房弘真は、鎌倉から南北朝時代の僧で、文観は字で、諱を殊音とし、西大寺の僧であった頃は弘真と称し、後に弘真と改めた。弘安元(二二七八)年に生まれ、正平十二(二三五七)年に八十歳で没した。西大寺の頃はもろろん律僧であったし、同時に伝法灌頂も受け、西大寺流の真言を継承した。その後、正和五年(二三一六)醍醐寺報恩院の道順より伝法灌頂を受け、後醍醐天皇の護持僧となっていく。これにより天皇の信任を受け、東寺長者、醍醐座主にまでのぼりつめていった。文観房弘真が制作ないし制作に関与した画像は現在十件が知られており、関連の作例も数件あり、著者が述べているように画僧と称してもいい僧で

となっている。第一章の出自から始まっているように、本書は彼の弟子が筆写した「瑜伽伝灯鈔」によりながら、文観房弘真の関連の美術作例を中心として出自から没年までを編年形式でまとめられている。著者がこれまで発表してきた論文のうち、文観房弘真に関するものをもとにしながらも、単なる論文集ではなく文観房弘真の生涯という時間軸の中で再構成され、新稿も多く一冊の研究書として完結している。最近の美術史の研究書にはない濃やかな書といえる。私も著者の論文を繙読してきたが、なるほどこのようにこれまでの一つひとつの論考を蓄積、つなげていくとこのように結実するのかとやっとわかってきた。

第一章から第二章までは西大寺の律僧としての事績と西大寺流の造像に関する諸問題が考察されている。第三章からは、醍醐寺において法脈を受け継いだ時期、真言僧としての弘真や付法に関する考察となっている。第四章から以降は弘真が宮中の護持僧として後醍醐天皇と関係が密になり、

伝法灌頂を授けたり、天皇が崇敬する愛染明王像の制作にも深く関わるようになる。それらの功績によって律僧出身者が醍醐座主、さらには東寺長者にまで登りつめる姿を詳述している。第六章からは後醍醐天皇が吉野に移って、南朝が成立、弘真もこれにしたがって吉野に住して以降を考察、事相僧としての弘真の姿を浮かび上がらせている。付章は文観房弘真が教法を授けた付法の伝授者についての考察がなされている。

こうした事績に加えて弘真が描いた画像、制作に関わった仏像などの図像・銘文・像内納入品などさまざまな点からの考察に基づきながら、史料からだけでは見えない律僧としての弘真や密教僧としての信仰や独自の考えなどを指摘している。僧の一生の事績の検討の流れの中に美術作品の検討が巧みに交わっているものといえよう。一僧侶の画業を紹介するのではなく、そこから当時の彫像や密教画の問題に広く展開しており、諸所に遺る特異な像容を示す愛染明王像や不動明王像、

十一面観音像などを弘真の思想にもとづく造形としてその特異性や弘真との関連性を追究している。さらに、弘真の作例の考察から西大寺流の追善供養の尊像としての文殊菩薩画像や、悲母供養としての如意輪観音画像が特定の尊像とされていたことを明らかにしている。

かつて著者は町田市立国際版画美術館に学芸員として調査・展示に従事し、その頃より鎌倉期の仏教版画の調査研究をおこなっており、その成果が本書にも生かされている。現在も真言律・西大寺流の諸寺院の文化財調査を精力的に行っているが、作品の綿密な調査にもとづく考察には説得力があり、文献史料では不明な点を多く解決している。

また、鎌倉復興期の西大寺関連の彫像には像内納入品があるものが多い。著者の考察は、弘真関連の美術作例から発展して仏教彫像の納入品の意義に関する点にまで及んでおり、最近の彫刻史の像内納入品の意味論に大いに寄与している。

本書は、これまでの後世の中傷により邪僧とも評され偏った評価をされてきた弘真のイメージにつき、ひとつひとつの事績をできるだけ史実に忠実・公平に検証している。弘真関連の作例は知られてはいたが、全体像をまとめたものはこれまではほとんどなかった。西大寺流の律僧出身という

ところから出発して、その足跡を編年式に辿って西大寺流、報恩院流の事相僧の面から関連する美術作品などを考察することによって美術史の立場から再評価しようとするものとして推奨されよう。

なお、本書第五章に詳述される広島・浄土寺の不動明王坐像について最後にこの場を借りて少し付記しておきたい。本像は頭部の頂蓮の上に宝珠を頂く珍しい不動明王像である。こうした遺例は彫像でも数例あり、宝珠との関連から注目されるものであるが本像の場合、この宝珠は別のものに取り付けられていたものの転用であることがわかった。調査に際して同行させてもらったのであるが、むき出した上歯牙には柄穴のようなものが見られ、当初は金属製の上歯(玉歯)が取り付けられていたものと考えられる。調査時には水晶製の歯が取り付けられていたものと言及してしまっていたが、柄穴があるところからすれば金属製のものであると思われる。いずれにしても生身仏として特異な不動明王であることは間違いない。生身信仰の観点からも関連作品の考察されることが期待される。

(かわせ よしてる 文化庁美術学芸課文化財調査員)